Rotary

2023～2024年度

国際ロータリー第2630地区

岐阜Bグループ

ガバナー公式訪問

合同例会・IM

世界に希望を生み出そう

開催日／令和5年9月9日（土）

会　場／ホテルグランヴェール岐山

ホスト／岐阜東南ロータリークラブ

IMテーマ
「クラブ相互の交流で、『それでこそロータリー』を体感しよう」

プログラム

会長・幹事懇談会　【 5F 乗鞍の間 】

10:30	登録受付
11:00	会長・幹事懇談会

ガバナー公式訪問合同例会　【 3F 鳳凰の間 】

【司会進行】 髙 橋　圭 司

11:30	登録受付(3F)・食事(5F)		
13:00	点鐘	岐阜東南RC会長	藤 井　達 郎
	ソング(君が代・奉仕の理想)	ソングリーダー	大 橋　匡 幸
	歓迎の挨拶、特別出席者紹介	岐阜東南RC会長	藤 井　達 郎
	岐阜Bグループ各クラブ 活動方針発表		各クラブ会長
	出席報告	親睦出席副委員長	毛 利　敏 忠
	ニコボックス投函発表	ニコボックス委員長	山 岡　操
	ガバナー卓話	第2630地区ガバナー	篠 原　一 行
14:00	点鐘	岐阜東南RC会長	藤 井　達 郎

IM (Intercity Meeting)

【司会進行】 田 端　大 嗣

14:15	点鐘、IM開会挨拶、特別出席者紹介	ガバナー補佐	岡 部　賢 明
14:30	ガバナー挨拶	第2630地区ガバナー	篠 原　一 行
14:35	IM実行委員長挨拶、講師紹介	IM実行委員長	大 野　英 樹
14:40	記念講演	映画監督	神 山　征 二 郎 様
	講演テーマ「映画監督の仕事」～映画が見つめた世界～		
15:40	IMカウンセラー講評	パストガバナー	木 村　静 之
15:50	次期ホストクラブ発表	ガバナー補佐	岡 部　賢 明
	次期ホストクラブ会長挨拶	岐阜南RC会長	松 波　和 寿
	閉会挨拶	IM実行委員長	大 野　英 樹
16:00	点鐘	ガバナー補佐	岡 部　賢 明

ガバナー公式訪問合同例会

歓迎の挨拶

岐阜東南ロータリークラブ
会長　藤井　達郎

本日は、国際ロータリー第2630地区岐阜Bグループの合同例会に、多くの皆様にご参加頂き、誠にありがとうございます。又、篠原一行ガバナーはじめ特別出席者の皆様方におかれましては、ご多用のところ、御隣席賜りましたことに心より感謝申し上げます。私は岐阜東南ロータリークラブ今年度会長を務めます藤井達郎と申します。何分にも経験実力ともに充分とは言えず、皆様にご不便やご迷惑をおかけするかと存じますが、ロータリーの友情に支えて頂き、今日一日、ホストとして精一杯務めさせて頂きますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

本日は、篠原ガバナーをお迎えしてのガバナー公式訪問でございます。午前中に行われました会長幹事懇談会は、岡部ガバナー補佐進行のもと、各クラブ会長・幹事の皆様から活動状況や目標についての発表が行われました。又、それに対するガバナーからのご指導やアドバイスを頂き、非常に有意義な懇談会となりました事をここに御報告申し上げます。

さて、今年度のRI会長ゴードンR.マッキナリー氏のテーマは、「世界に希望を生み出そう」です。世界を襲ったパンデミックや、もうすぐ丸2年になろうとする戦争の影響により、世界中において、なおも多くの人々が傷ついています。日本では、今年は各地でコロナ自粛期間を経て4年ぶりに復活したイベントが増えました。これは非常に喜ばしい事です。本日のIM・合同例会も4年ぶりにフルスペックで開催する事ができました。少しずつ日常を取り戻しつつありますが、私達大人が「何年ぶり」と言っている時間は、青春真っただ中の若者にとっては取り戻す事のできない、かけがえのない時間であります。我々ロータリアンには、今こそ彼らに寄り添い、その失った時間を取り戻すべく「希望」を描く事ができる環境を創る使命があると思います。本日のIMでの講演を、映画監督神山征二郎様にお願いし、カメラを通して鋭く見つめ続けられた日本社会とこれからの日本人の在り方について語って頂きます。若者が「夢」と「希望」に満ち溢れる社会を実現する為に、ロータリーが果たす役割について共に考える機会としましょう。そして、どうか本日が「世界に希望を生み出そう」というRIが掲げるテーマの第一歩になることを、心より祈念申し上げ、私からの歓迎のあいさつとさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願い致します。

特別出席者名簿

（敬称略）

	氏 名	所属クラブ
ガバナー	篠原　一行	（多治見リバーサイド）
パストガバナー・カウンセラー	木村　静之	（岐阜加納）
直前ガバナー	高橋　伸治	（岐阜）
ガバナーエレクト	亀井 喜久雄	（名張）
地区代表幹事	山本　和彦	（多治見リバーサイド）
岐阜Aグループガバナー補佐	石井　亮一	（岐阜）
岐阜西濃グループガバナー補佐	中村　一	（大垣中）
岐阜東濃グループガバナー補佐	丸山　充信	（中津川センター）
研修委員会委員長	岩田　勝美	（羽島）
公共イメージ委員会委員長	近藤　浩史	（岐阜東南）
D.E.I推進小委員会委員長	野原　佳子	（岐阜淡墨）
インターアクト委員会委員長	今津　美憲	（岐阜サンリバー）
"ロータリー財団部門ロータリー平和フェローシップ小委員会"委員長	道家　嗣典	（岐阜加納）
米山記念奨学委員会委員長	長谷川 隆志	（岐阜東）
米山学友会小委員会委員長	笠原　幸治	（岐阜長良川）

会長・幹事懇談会

会長・幹事懇談会の様子

会長・幹事の皆様

合同例会

ご挨拶　藤井達郎会長

司会進行　髙橋圭司幹事

合同例会の様子

ロータリーソング　リーダー　大橋匡幸会員

投函発表　山岡操ニコボックス委員長

ガバナー卓話　篠原一行ガバナー

ご挨拶・卓話

RI第2630地区
ガバナー　篠原　一行

1. 各クラブの皆様方には、日頃より、地区運営にご理解ご協力をいただきましてありがとうございます。本年1月に、国際協議会に出席しました。長くサンディエゴで開催されていた国際協議会ですが、浦田パストガバナー年度から、アメリカフロリダのオーランドで開催されるようになりました。コロナの影響で3年ぶりの現地開催となりました。浦田パストガバナー、高橋直前ガバナーはリモートで参加されています。皆さんご存じの通り、オーランドと言えば、数々の有名なテーマパークのある所です。
2. RI会長のテーマは、「CREATE HOPE in the WORLD世界に希望を生み出そう」であります。私たちの目標は、紛争から世界が立ち直れるように、希望を取り戻すことです。そうすれば、私たち自身のために持続可能な変化をもたらすことが可能となるでしょう。平和とは、希望が根づくための土壌です。世界と自分自身の中に平和を築くことに力を注げば、ロータリーはより平和で、より希望のある世界を築く手助けができると思います。ロータリーは、今までの多くの奉仕プロジェクト事業を通して、多くの人に多くの希望を与える活動を実践してきました。これこそ、ロータリーが、世界にもたらしている変化ではないでしょうか。この変化が、一つずつ希望を取り戻し、新たな希望を生み出していけると思います。平和とは、紛争や戦争が無くなることは勿論ですが、治安が良いこと、貧困や飢餓がなくなること、家族と平穏に暮らせること、人として最低限の文化的な生活ができることではないでしょうか。そのために、ロータリアンは奉仕の心をもって、未来のために多くの課題の解決に取り組んできました。これからも、世界に希望を生み出すためには、多くの人たちに希望を持ってもらえるような活動をしていきたいと思っています。そのためには、「奉仕の心」を常に持って、そして「未来の人たちのため」に、それを「つなげていくこと」が大切と考えています。私のガバナーとしての地区方針は、「奉仕の心を未来へつなげよう」です。
3. 日本のロータリーは、例会をとても大切にしています。「Enter to learn, Go forth to serve　入りて学び、出でて奉仕せよ」例会の場で奉仕の理念を学び、外では奉仕の実践を!であります。日本には素晴らしい『地域』があって『ロータリー』があって『ロータリアン』がいます。例会で多くのことを学び、奉仕の心を磨き、奉仕の実践をして、奉仕の心を多くの人たちにつなげていくことで奉仕の輪が広がり、地域社会の発展、広くは世界の発展、世界平和に貢献できるようになるでしょう。私たちが、未来のために共に行動しようではありませんか。
4. 例会は、職業人としての倫理を向上させ、理念の浸透を図り、互いに切磋琢磨し学ぶ場であります。例会のプログラムを大切にし、例会への出席を大切にしましょう。例会のプログラムを工夫するなどして、例会に出席してよかったという気持ちで帰ってもらえるようにしたいものです。中でも会長挨拶はとても大切であると思っています。また、多くのクラブが、クラブ研修リーダーを選任していただいていますが、クラブを活性化するためにも、クラブ内での研修活動を定期的に実施することは効果的と考えます。ロータリーの理念やロータリーの素晴らしさが身に付けば、クラブの強化につながると思います。それが強いて言えば会員増強にもつながると考えます。入会して3年未満で辞める方が50%近くいます。ロータリーの理念も、ロータリーの素晴らしさも理解しないでやめていかれることは、本当に残念でもったいないと思います。
5. 次に、日本のロータリーは、職業奉仕、4つのテスト、ロータリーの目的、例会を重視してきました。そして、ロータリーの二つの公式標語である「超我の奉仕」は、奉仕の哲学を表しています。「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」これは実践論です。他者に対する正しい経営の科学のみが引き合います。日本のロータリーでよく話される近江商人の三方よしです。大切なことは、世間良しです。
6. また、ロータリーの定義として、2010年に出されたロータリーの中核的価値観というものがあります。『奉仕・親睦・多様性・高潔性・リーダーシップ』の5つです。ロータリーの目標でもあり、ロータリーを定義づける不変的な価値観です。
7. そして、2017年に、私たちロータリアンは、「世界で、地域社会で、そして自分自身の中で、持続可能な良い変化を生むために、人々が手を取り合って行動する世界を目指しています。」というビジョン声明が出されました。これを実践するための戦略計画があります。『より大きなインパクトをもたらす。参加者の基盤を広げる。参加者の積極的なかかわりを促す。適用力を高める。』です。先ほどの5つの価値観、ビジョン声明を達成するための戦略計画といえます。
8. よって、「会員基盤の強化」が大変重要となってきます。日本のロータリーは、25年前に約13万人でしたが、今は約8万人弱です。若い世代や経験豊富な退職者世代、また性別を問わず入会していただきたいと思います。クラブは、多様性・ダイバーシティの概念を念頭において、仲間を増やす工夫をして頂きたいものです。世界で女性会員の割合は約25%ですが、日本は約7%です。全体の

会員数はコロナの影響でここ3年間は減少しており、大変厳しい状況です。各クラブ平均1人増えれば、地区全体で73人増えます。会員の多いクラブは、更に増員増強にご尽力をお願いします。そのためには、クラブを魅力あるものにすることが肝要と考えます。そして一人一人の会員と向き合い、意欲を持って奉仕活動をすることができる会員が数多く存在することが、クラブの魅力になるのではないでしょうか。元気で居心地の良いクラブづくりに積極的に取り組んでいってほしいと思います。

9. そして、「DEI　、ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン。」あまりなじみのない言葉かもしれませんが、現在とても大切なワードとして私は地区方針にうたっております。この取り組みは、多くの企業で推進されています。当地区では、昨年度よりD・E・I委員会を立ち上げ、誰でも活躍できるロータリーに推進していきます。

10. ここで公共イメージと認知度の向上についてお話しします。「ロータリー」は意外と世間に知られていません。あるいはロータリーという名前が知られていても、どんな活動をしているかはあまり知られていないようです。我々の活動が世間に認知されることで、我々の励みにもなると思います。奉仕活動の機会を捉え、クラブがこれまで行ってきた活動を伝えるとともに、ロータリーが国際的なネットワークで実践している「ポリオ撲滅」に力を入れていることなども伝えていきたいです。

11. ロータリーの奉仕は皆さんご存じの通り、五大奉仕です。5つの内、国際ロータリーRIが実際に携わって実施しているのは青少年奉仕だけです。ロータリーのキーワードは「未来のため」です。RIは青少年交換・インターアクト・ローターアクトに力を入れています。共にとても素晴らしい事業です。全てロータリーファミリーです。

12. さらには2015年以降、SDGsがよく語られています。2030年までの持続可能な17の目標を改めてかいつまんでみますと、その多くが以前より、ロータリーの奉仕プロジェクトプログラムの中に組み込まれていることに気付かされます。以前は6つでしたが、「環境の保護」がプラスされて、7つの重点分野になりました。それを受け、各クラブがさらに様々な奉仕プロジェクトを実践するようになりました。『Doing good in the world 世界で良いことをしよう』そこで、ロータリー財団の地区補助金、グローバル補助金制度を活用して、地域社会で、また海外で奉仕プロジェクトを実践してくださるようよろしくお願いします。

13. ロータリー財団は、世界では非常に高い評価を受けています。あの有名なチャリティナビゲーターで、連続15年最高位の4つ星を頂いています。お金の使い道、使い方、透明性、いずれの面においても高い評価を受けています。財団奨学生も素晴らしいです。皆さんご存じの緒方貞子さんや、国連の事務次長の中満泉さんを初め、数多くの財団奨学生が世界各地で大活躍してみえます。今後も世界に羽ばたく人材を育成することができるよう、財団へのご寄付、一人当たり150ドル以上を、引き続きよろしくお願いします。

14. ポリオは非常に感染性の高い病気であり、特に感染しやすいのは5歳未満の子どもです。日本では一般に「小児まひ」と呼ばれることもあります。ポリオウイルスは人から人へ感染し、最も多いのは汚染水を通じた感染です。根絶した天然痘と同じで、媒体を通じてではなく人から人ですので、ネガティブではなくてポジティブに応援して頂きたいと思います。今年になって、アフガニスタンとパキスタンで6月20日までに6件発症が確認されています。残る0.1%のポリオの根絶が課題であり、ワクチン投与を続けなければなりません。日本でも毎年ポリオワクチン投与で約400億円使用しています。ポリオ撲滅が実現すれば、ロータリーの人道奉仕の成果として、歴史に残ります。引き続きポリオ・プラスへの寄付のご協力をお願いします。

15. 米山記念奨学生。ロータリーの米山記念奨学会の制度は、1952年に始まりました。戦後まもなくです。創設の目的は、「日本が再び戦争をしないという強い意志を持ち、そして、我々ロータリアンが平和を築く努力をする」、という趣旨です。日本で勉学・研究をしている留学生への支援を通じて、信頼関係を築き、留学生の皆さんに、世界平和の懸け橋となっていただくことを願って設けられたものです。留学生が、専門的な研究で成果を挙げられるとともに、これを機会に、各国のロータリアンとの交流を通じて、国際的な友好、信頼を深めていただき、日本と母国との懸け橋になって活躍して頂きますように願っています。米山記念奨学会への寄付も宜しくお願いします。

16. ロータリー賞、RI会長特別賞を目指していただきたいです。3つの戦略的優先項目に沿っていくつか項目がありますが、それほど難しくはありません。予定者の段階で、マイロータリー、クラブセントラルから入力していただけます。

17. 元気なクラブ、魅力あるクラブ、居心地の良いクラブとは、親睦や例会を会員が楽しみ、ロータリーを通じて友人が増え、みんなの知識レベルやロータリーの理解が深まり、奉仕活動を通じて世の中の為に良いことをしているという喜びを実感できるクラブではないでしょうか。そして、新しい会員が入って仲間が増え沢山の同好会があり、他のクラブとも交流があるクラブにしていきたいものです。ロータリーに大切なことは、多様性と寛容な心だと思います。ロータリーは時代とともに変化しています。固定観念に縛られない新しい風を取り入れて、皆で一緒になってより良い方向へ考えていきましょう。

18. ロータリーは、ロータリアン同士の親睦を重ねて、共に学び、そして社会に貢献する世界的な団体であります。日本で大切にされてきたロータリー観を一言で言えば、『親睦・学び・成長・奉仕』です。

19. マイロータリーでは、多くの正しい情報が得られます。日本国内34地区、第2630地区のマイロータリーへの登録率は約30%、全国平均より大変低いです。各クラブともぜひマイロータリーの登録をお願いします。入会と同時に登録しているクラブもあります。地区登録率50%目指して、重ねて宜しくお願いします。そしてもう一つ、ロータリーカードについてお願いがあります。個人とクラブ用、地区用、地区委員会用とありますが、クラブカードは、人頭分担金やR財団への寄付金送金も、マイロータリーよりRカードで送金が大変便利です。地区カード、そして地区委員会カードの推進についても合わせてよろしくお願いします。使ったお金の0.3%がポリオに自動的に送信されます。

20. 最後になりますが、本年11月18日(土)に多治見市で地区大会を開催いたします。テーマは、「希望と未来を、あつく語ろう　多治見のまちで。」です。多くの皆様方のご登録、ご参加を宜しくお願いいたします。日本の伝統、しっかりとおもてなしをもって皆様方をお待ちしています。

Bグループ6クラブ方針・活動報告

岐阜南ロータリークラブ

岐阜南ロータリークラブ
会長　松波　和寿

岐阜南ロータリークラブの第68期会長の拝命に当たり、力不足ではございますが懸命に職務をまっとうする所存です。一年間よろしくお願いいたします。

新興感染症、ロシア・ウクライナ紛争、様々な天災など予想できない大きな変化に翻弄され世の中は大きな変化が起きています。COVID19のパンデミックもだれがこんなに長く続くと予想したでしょうか。また今後もほんとに終息は来るのでしょうか。誰にもわかりません。正解が無い問題に人類は解答を求めています。こんな時代にロータリアンは何ができるのでしょうか。自分のことは自分で守る「自助」、地域や近隣で支え合う「共助」、国や自治体が支える「公助」がありますが、ロータリークラブの活動は職業を通じてまた社会奉仕をもってこの「共助」を実践していると思います。そのためには多くの仲間が必要です。

2023-24年度ゴードン　R.　マッキナリー国際ロータリー会長はテーマとして「世界に希望を生み出そう」を提唱し、ロータリーが平和やメンタルヘルスのために活動し、世界に希望を生み出すよう呼びかけています。また、そのためには対話を通じて信頼を築くことが重要であると訴えています。さらに講演の中ではロータリー全体で多様性、公平さ、インクルージョンを強調し続けていくこと述べています。ロータリアンは様々な職種の集まりであり、日常とは違う職業人に囲まれて活動しています。考え方や常識も微妙に違いがあります。

私の医療界での常識は社会では非常識ともいわれます。でもロータリアンはお互いに個々の「違い」を受け入れ、認め合い、大きな力を生み出しています。ロータリーは競争ではなく、協力であるという原則があります。多様性を認めて仲間を増やしましょう。定款にもあるように年齢、性別、民族的多様性が基盤です。女性会員の比率もあげましょう。日本語が話せる外国人が仲間に入るのも楽しいと思います。

例会は楽しく有りたいですね。今日も参加してよかった。小さくてもいいから何か得るものがあれば、また来週も参加しようと思います。私は一時期参加率が極めて悪くご迷惑をかけましたが、例会に定期的に参加するようになりロータリーが日常になりました。仕事と同等としてカレンダーにはロータリーの予定が刻まれています。新入会員や出席率の低い会員にとってもロータリーが日常生活の基盤になるようなクラブにしたいですね。新人会員はいろんな会員と話せるように例会での席も工夫しましょう。顔と名前を覚えるのが第一歩です。参加が少ない会員には、定期的に例会参加を促しましょう。
多様な仲間を増やしましょう。そして認め合いましょう。

クラブターゲット:「ダイバーシティ」:広げよう友の輪
基本方針は多様性を認め合い、

1. ロータリアンを増やし友の輪を広げよう
2. 刺激し合える友の輪を広げよう
3. 何でも相談できる友の輪を広げよう
4. 委員会を通じて友の輪を広げよう
5. 例会出席が楽しい友の輪を広げよう
6. 自分の知らない職業に友の輪を広げよう
7. 他クラブにも友の輪を広げよう

岐阜東ロータリークラブ

岐阜東ロータリークラブ
会長　吉川　康彦

当クラブの今年のテーマは「ようこそロータリーサロンへ」とさせていただきました。
週1回の例会が会員の皆様の憩いの場となりますよう、努めております。

楽しいひとときとして、本日の行事前に　3分～5分　を〇〇会員さんの時間として原稿なしのフリートークをしていただいています。

当クラブは来期55周年を迎えますが、それを前に今一度 会員の皆さんの相互理解が深まればと思っています。

この一年が来期の弾みの一年となります様、努めて参ります。

岐阜加納ロータリークラブ

岐阜加納ロータリークラブ
会長　平松　洋一

◎今期の会長方針は、
「奉仕プロジェクトを実践し、ロータリーを楽しむ」です。

約束1 ロータリーは「親睦に始まり親睦に終わる」と言われています。
親睦活動が、ロータリアンの『絆』を固くし、奉仕活動の出発点となります。品格ある魅力的なプログラムを企画し、会員とそのご家族の積極的な参加を奨励し、実施をいたします。コロナにより失われた3年間を取り戻します。
約束2 充実した新会員研修を実践していただきます。
クラブ研修リーダー及びロータリー情報委員会を中心にIGMの機会はもちろん、特に44～47期入会の新人会員を主に対象として、オリエンテーション(ラウンドテーブル)などを充実させ、実施します。
約束3　奉仕プロジェクト(三大奉仕部門である社会奉仕・国際奉仕・青少年奉仕の分野を担う)を実践し、ロータリーを楽しむ。
＊「岐阜市の子供たちを対象にした『仕事探検隊』を立上げ、地域の子供たちと私たち岐阜加納ロータリー会員とのコミュニケーションを図ります。(財団の地区補助金を活用します。)

◎岐阜加納クラブは、伝統的に奉仕活動が大変、活性化しているが特徴。
≪過去にも地区補助金・グローバル補助金を利用した奉仕活動が充実≫
① 2019-20年度　グローバル補助金
「タイのクラビ病院に医療機器を寄贈」現地タイでの研修ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの実施など「持続可能性」もある。
② 2020-21年度　地区補助金
「加納の歴史文化継承プロジェクト」クラウドファンディングを行い中山道加納宿まちづくり交流センターにジオラマ等を作る
③ 2022-23年度　地区補助金:
「社会福祉法人日本児童育成園へのボルダリング設備の設置と地域貢献
↓④ そして、今期ですが・・地区補助金を申請実施。
2023-24年度　地区補助金「岐阜市の子どもを対象としたお仕事探検隊」
・第1回7/25 熊田会員/熊田法律事務所『弁護士の仕事を体験しよう!』
・第2回7/28 坪井会員/協和安全『みんなの安全を守る!交通安全の看板を作る仕事』(＊NHK岐阜・岐阜CNNでニュースに)
・第3回8/7 黒田会員/黒田製作所『指先感覚が機械より正確?金型ものづくりの魅力』
・第4回8/21 宮森会員/だるまミート『食卓を支えるお肉屋さん!食肉加工・流通現場から学ぶ食の大切さ』　を実施済。
≪もちろん、各委員会実施の伝統的にある奉仕活動は、実施≫
●≪社会奉仕≫
・献血活動
・日本児童育成園におけるケーキ作り体験奉仕。年2回
・歳末助け合い運動
・加納の歴史・文化継承プロジェクトの継続支援
●≪国際奉仕・青少年交換委員会としては、≫
・2019-20年度 受入 フランス BRUCKLER,Mathilde,Francoise　派遣 フランス 伊藤 未奈
・過去、40年強の加納RCの実績があります。
●≪青少年奉仕≫
・加納中学の星空観測会11月
・岐阜ジュニアゴルフトーナメント3月
●≪米山≫
・2022-23年度奨学生 受入 スリランカ ナブルナゲ , カラニ ニメージャ ランガニ

岐阜エトスロータリークラブ

岐阜エトスロータリークラブ
会長　田口　真也

1. 奉仕プロジェクトは充実しているか
   A. 地区補助金の活用状況
      補助事業内容がまとまらず、次年度繰越になりました。多額の寄付を行っていましたが準備がしきれず残念でした。
   B. インターアクト
      クリスマス会に参加していただいたり、恵光学園への支援活動へ参加いただいたりと積極的に交流が出来ております。
      また、吹奏楽の発表会への参加も行いました。発表会の際、エトスとして花の贈与を行った方が良いとの声が出てきました。
   C. ローターアクト
      進展はありませんので、今後前向きに活動をしていきたい。
   D. 青少年交換
      積極的に行いたいが、受け入れ先などの問題もあり活動が出来ていない。
   E. 米山
      活動が出来ていない。積極的にセミナー参加の呼びかけを行い、前向きに検討をしていきたい。

2. 増強の状況、若手会員、女性会員、退会者
   会員増強はクラブ運営にとってとても重要な活動の一つととらえております。
   増強で成功した、各務原ロータリーへ例会参加を行いクラブの雰囲気や活動状況の確認をしていきたい。
   退会希望の会員に「今日からロータリアン」を渡し勉強会への参加をお願いします。
   一味違った勉強会を開き退会者をなくす。
   女性会員は現在2名ですが、4名ほどに増やし活気あふれるクラブにしていきたい。

3. 会員の意欲
   欠席の目立つ会員に卓話を依頼し場の雰囲気創りを積極的に行ってもらう。
   役員の内容を説明し、責任感を養う。　イベント参加を即し、コミュニケーションをとる。

4. クラブの長所・短所　財団寄付の状況・米山寄付状況
   少人数クラブの為、意見の交換がしやすく意見も通りやすい。　欠席者が出ると代わりの者がいない。
   10月の米山月間、11月の財団月間に積極的に寄付を募り、多額の寄付者に対し記念品を贈る。
   家族例会では、お子様やお孫様が楽しめるイベント企画を行い参加しやすい例会にする。

5. 地区委員への出向状況
   出向している会員がいない為、一人は出していきたい。　参加意欲を出すために、地区事務所との交流を図りたい。

6. マイロータリーの登録状況・クラブセントラルへの目標設定入力・Rカード
   マイロータリーの登録者は50%以上を達成しています。登録すると何が良いか、何ができるのかを明確にお知らせする。
   クラブセントラルへの目標を設定し、会員とヒアリングを行う。特に会員増強にあっては力を入れていきたい。
   クラブカードを作っている為、積極的に使用しポリオ寄付も即す。

7. 居心地の良いクラブづくり
   夜間例会を復活させ、例会を有意義なものにする。アルコールもふまえ出席数を上げる。
   最終例会は別会場で行い、出席者を増やす。活気がます。

8. その他
   クラブ相互の交流を積極的に行いたい。ローテーションの内容を提示いただきたい。
   バスツアーの計画。
   チャリティーゴルフへの参加。
   クラブ訪問記録を作成する。

岐阜城ロータリークラブ

岐阜城ロータリークラブ
会長　堀江　大典

今期の活動方針
「ロータリアンとして自信と誇りを持てるよう本気で学びロータリーライフをエンジョイしよう」
　今期当クラブは、しっかりとロータリーの基本を学びながら、例会の充実に取り組みたいと考えます。世界を明るくするには、まず自分たちが明るくならなくては前には進めません。「ワクワクどきどきする例会」づくりを目指しております。
　月1回以上の夜間親睦例会を行い、単なる飲み会だけで終わるのではなく卓話、天体観察、法話など内容の濃い例会を計画しております。
　「基本を学ぶ」に関しては、月1回以上の外部内部卓話を予定しております。外部卓話は地区の委員会の皆さんに講師をお願いしてロータリーの基礎や応用編を学んでいこうと思っております。
　会員増強では、毎月第四金曜日「ご飯会」と称して会員候補者を囲んでの懇親を計っております。同様に「ゴルフ会」は毎月第一木曜日「ご飯会」同様会員候補者を招いて親睦を深めています。今期末までにあと5名合計25名を目標にしております。
　今年度の奉仕事業は東クラブさんと合同でけやき並木清掃、自クラブでの新荒田川清掃、恒例の長良川稚鮎放流事業を予定しております。
　補助金事業は来年3月岐阜城をテーマに岐阜市、市民、ロータリアンの参加で100名規模の事業を計画中です。
　親睦に関しまして、自由参加ではありましたが、7月3～5日、7名で北海道釧路南RCに研修旅行に行って参りました。ちょうど釧路南RCが会員増強の当番の様で釧路北RCをはじめ多数のロータリアンが参加され、交友を深めることが出来ました。また11月には当クラブ会員が出場する富士スピードレースの応援ツアーも計画中です。
　会員は少ないですが様々なプログラム、イベントを通じて、メンバー同士の親睦を深め岐阜城ロータリークラブは楽しいと言って頂けるクラブにして行きたいと考えます。今後とも皆様方のご指導をお願い申し上げます。ありがとうございました。

岐阜東南ロータリークラブ

岐阜東南ロータリークラブ
副会長　中島　浩樹

　岐阜東南ロータリークラブは、来年で創立50周年という節目の年を迎えます。主な奉仕活動のエリアは羽島郡（岐南町・笠松町）および岐阜市近郊です。今年度の活動方針として「プラスワンの活動で繋ごう輝かしい50年へ」というテーマを掲げています。ここ数年は、コロナ禍の影響もあり、特に外部団体との奉仕活動が協賛金の贈呈に留まる等、活動が希薄になっていました。今年度は、ロータリアン自らが汗をかく実践的奉仕活動に取り組み、人と人との交流とその橋渡しを目指しています。
　主な事業として、8月には、従前の日本児童育成園へお寿司を振舞う事業の代わりに、今年はこれを「プラスワン」の実践・ふれあい重視という事で、一緒にうどん作りを体験する例会に内容を変え、大変喜んで頂きました。今後の事業として、岐南フェスタでの献血、岐阜工業高校吹奏楽部との慰問活動、羽島郡スポーツ少年団大会、旧中山道RCより運営を引き継いだサッカー大会、が予定され、どれも伝統ある行事ばかりですが、各事業においても例年の運営と交流におけるひと工夫の「プラスワン」が実践できたらと考えます。
また、次年度はインターアクト年次大会の地区ホストを務める役回りであり、素晴らしい大会を実現する為、今年度は岐阜工業高等学校インターアクト部の皆さんと協力して、その準備にまい進する1年にしたいと考えております。
　49年の我がクラブの伝統と歴史を継承しつつ、篠原ガバナーが唱えられる1回1回の例会を「プラスワン」の精神で臨み充実させる事が、職業人としての倫理、そしてそれがもたらす地域への幸福、そしてそれらの集合体により、世界への「希望」へ繋がると確信致します。
　岐阜東南ロータリークラブは今年度の目標「プラスワン」を合言葉に実践し、来るべき50周年に向かい一丸となって進んで参ります。

開会の挨拶

RI第2630地区岐阜Bグループ
ガバナー補佐　岡部　賢明

今期、篠原ガバナーの補佐として1年お世話になります岐阜Bグループの岡部です、よろしくお願いいたします。

コロナも5類化され、4年ぶりに、やっと本来の姿でのIM、合同例会開催の運びとなり、喜ばしいかぎりです。

本日はRI2630地区岐阜BグループのIMの開催にあたり、篠原ガバナー・パストガバナーの皆様・亀井ガバナーエレクト・地区代表幹事・各グループガバナー補佐の皆様・地区委員会委員長の皆様に、ご臨席賜りましたことに、心より感謝申しあげます。
正面玄関では「ポリオ根絶ラッピングカー」も参加してこのIMを盛り上げてくれております。

7月の期首訪問の折には、会長幹事懇談会・クラブ協議会で各クラブの会長及び各委員会の方針等お聞きいたしました。篠原ガバナーの問い掛けにもありますように「居心地の良いクラブ・楽しいクラブづくり」をメイン方針となさっているクラブが多く見られ、どのクラブも輝いていると実感しました。

IMの目的は「研修」「親睦」「交流」であります。
グループ内での交流ということが幾度も取りざたされますが具体的な行動まで進展することなく終わってしまっているのが現状かと思われます。

篠原ガバナーも「他のクラブと交流があるクラブにしていきたいものです」と言われています。
そこで岐阜Bグループの今期のテーマを「クラブ相互の交流で、それでこそロータリーを体感しよう」と掲げました。（Rソングにもあります「どこで会ってもヤーと言おう」です）
会員増強・退会防止・クラブの活性化のためにも是非とも実りあるものにしたいと思っています。
幹事会でも協議事項として取り上げ、クラブ訪問のローテーションも早速組んで頂きました。結果を楽しみにしているところです。
「クラブ相互交流で友人が増え良かった・ロータリアンで良かった」との声が、各クラブ会員から聞こえてくるよう期待しています。

RI会長のテーマは「世界に希望を生み出そう」、篠原ガバナーの地区方針は「奉仕の心を未来へつなげよう」です。世界に希望を生み出すためには、奉仕の心を未来へつなげることが大前提で会員増強は恒久目標であります。「クラブ相互交流」が会員増強・退会防止・クラブの活性化につながれば幸いです。
各クラブのご理解ご協力をお願いいたします。

本日のIM記念講演は、岐阜県が誇る映画監督「神山征二郎」さんの「映画監督の仕事」～映画が見つめた世界～と題してお話しいただきます、皆様の職業におかれまして参考として頂ければ幸いです。

最後になりますが、本日のホストを務めていただきました岐阜東南ロータリークラブの大野IM実行委員長・藤井会長・髙橋AB統括幹事はじめ会員の皆様に深く御礼申しあげご挨拶とさせていただきます。

IM実行委員長挨拶

IM実行委員会
委員長　大野　英樹

皆様こんにちは、　この度IM実行委員長を仰せつかりました大野英樹と申します。

6年ぶりにこの壇上に上がらせていただきました。6年前にも実行委員長をさせていただいておりまして、バンド演奏もさせていただいたのが昨日のように思い出されます。

本日は神山征二郎映画監督をお招きして、
「映画監督の仕事」～映画が見つめた世界～ をテーマにお話をいただきたいと思っております。

実はですね、神山征二郎様とのご関係についてですが、私のクラブのチャーターメンバーであります川島和男会員が小学校中学校の同級生でご実家もお近くだということを聞いております。実は私も岐北中学校の後輩でございます。ということもあり、本当に親しみを感じているところです。

簡単なプロフィールはプログラムに書いてありますが、私からも少しご紹介をさせていただきます。

岐阜県岐阜市西郷というところがご出身で、北高へ進まれ、日本大学芸術学部映画学科へご進学された後、「鯉のいる村」で監督のデビューをされたということでございます。
皆様もご記憶にあるかと思いますが徳山村のダムに沈む村の映画「ふるさと」を作られたり、そのほか「ハチ公物語」など有名な映画が多数ございます。

私が特に印象に残っているのが知覧の特攻隊の映画でございまして、DVDを購入し、家でも拝見しております。

そういった社会的な教育映画を主に撮影されているということで、本日は非常に興味の深いお話しが聞けるのでないかと思っております。

神山先生、本日はどうぞよろしくお願いいたします。

それでは皆様ご清聴のほどよろしくお願いいたします。

講師紹介

IM記念講演

講演テーマ
「映画監督の仕事」～映画が見つめた世界～

講 師

神山征二郎氏
（映画監督）

◆代表作品
「ひめゆりの塔」(1982年)(1995年)
「ふるさと」(1983年)
「ハチ公物語」(1987年)
「伊勢湾台風物語」(1989年)
「さくら」(1994年)
「郡上一揆」(2000年)
「ラストゲーム最後の早慶戦」(2008年)
◆著書
「町が海におそわれた 伊勢湾台風物語」(1989年 学習研究社)
「生まれたら戦争だった 映画監督神山征二郎自伝」(2008年 ｼﾈﾌﾛﾝﾄ社)

プロフィール

岐阜県岐阜市出身
岐阜県立岐阜北高等学校卒業。日本大学芸術学部映画学科へ進学後、1963年に新藤兼人監督が主宰する「近代映画協会」に参加する。
1971年、『鯉のいる村』にて監督デビュー。1976年、『二つのハーモニカ』により日本映画監督協会新人奨励賞受賞。その後独立し、1983年に『ふるさと』を発表。文化庁優秀映画奨励賞を受けるなど国内外で高評価を受ける。1987年に『ハチ公物語』を大ヒットさせ、山路ふみ子映画賞受賞。名実共に、日本を代表する正統的な社会派映画作家の地位を確立する。大ヒットした『ハチ公物語』は、後年に海外での好評によりがアメリカ版リメイクにつながった。
アニメーション映画やアイドル映画が席巻する邦画界において、骨太の社会派作品を世に問い続け、50年余のキャリアで発表した作品は30点に達する。

記念講演

どうもこんにちは。ご紹介いただきました映画監督の神山でございます。『映画監督の仕事、映画が見つめた世界』って題名になっています。映画監督は、そう特別、珍しい職業ではありません。私が所属しております日本映画監督協会だけでも600人ぐらい、いますし、所属してない人も、その他に1000人か1500人ぐらい、いますから、特別そう珍しい職業ではないんです。

岐阜県で生まれて、東京へ出て、監督になった最初に、たまたま作ったものがありまして、『郡上一揆』の関係で、講演をさせてもらったときに作ったもの（スライド）なんですけども、私の出自、生まれ育ちとか、どんな経過をたどって今日の映画監督になったのかということ、最初にこれを見ながらご説明というか、お話をしていきたいと思います。

（最初を出してください。生い立ちと映画を志すまでというこれ。最初の写真、出していただけますかね。）今、お話に出ました、この会の一番古い会員の川島和男弁護士が実は、この中に写ってるんですけど、私も写ってるんです。これ小学校1年生のときの、こいつが私です。川島さんはどっかに写ってる。この近く、この辺、言いません。

昭和23年だと思いますけど、小学校1年生で「チュウコンドウ」といいまして、戦争中の地域の靖国神社みたいなもので、そこが学校の隣にありまして、そこの階段を使って、いつも記念写真、撮ってたんです。

約50人ぐらいの同級生で、当時は本巣郡西郷村だったんですけども、この2年後ぐらいに岐阜市と合併して、岐阜市西郷になりました。このときはまだ本巣郡西郷村で、総人口2300人ぐらいの小さな村なんですね。ですから、1学年1学級で1年生から6年生までずっと同じ子たちと一緒にいました。中にちょっと、戦争直後でしたから、東京や都会から疎開してきて、そのまま村に居着いた人も何人か入ってますけどね。

左に立ってる女性の先生がネギシ先生っていうんですけども、私の家のすぐ隣の隣、そこに専宗寺っていう浄土真宗の西本願寺の末寺がありまして、そこのお嬢さんだったんですけど。だから、子どものときから、よく知ってるんですね。

この方が、たまたま1年生のときの担任になりまして、2年生で持ち上がりだったんですけども、2年生になった途端に先生が来なくなりまして、それはなんでかというと、病気になられて、白血病という病気なんですけどもね。当時は、その病気の中身なんか全然分からなかったですが、半年ぐらい学校を休まれて、ある日、ネギシ先生、亡くなったっていう知らせが来まして。私は近所に住んでたということもありますけども、小さいときの知り合いだったんで、びっくり仰天して。

クラスを代表してお別れで、お寺の庫裏っていう所がありますけど、そこのお座敷に布団が敷いてあって、そこで白い布をかぶった先生が寝てまして。一応クラス代表、女の子と2人で行ったんですけども、死んだ先生の顔、見せますよね、大人が。死に化粧してたんだと思うんですけど真っ白な顔で、本当にまだ幼かったですから、いまだに焼き付いてるんですけども、そのときの先生の顔。それで、人は死ぬんだということをすごく、そのとき思ったんですね。まだ、人は死ぬなんてことは現実のものとは思えないような年頃ですから。

私、18歳で東京へ出てますけども、東京へ出てからも、お寺が隣ですから、自転車でお寺の前を通って自分の

家へ行くんですけれど、夜なんかは怖くて、お寺の前でスピードをばあっと上げて、その先生の死に顔がよみがえっちゃって。人間は、人は死ぬもんだということを最初に知ったきっかけになった経験なんです。

実は長いこと、そのまま映画監督になって、映画監督は物を作る仕事ですから、人間を描くっていいますか、人がどう生きてるかとか、どんなふうに生きたかっていうようなことで、物語にするのが映画の仕事ですから。そのときの、何ていうか、先生とのお別れっていうものが、その後もずっと尾を引いたような、今でも引いてるような気がするんです。(次、お願いいたします。)

これが、こいつが私なんです。3歳だったと思うんですけど。この後ろにいるのは父で、これが母です。戦争中、昭和19年ですね。おじさんが1人、出征をしていくっていうか、一番下のおじさんが軍、兵隊、徴兵を受けて、お別れの記念写真を撮った。これが兄なんですけど、これが姉かな。私は3番目の子どもで。

皆さんも経験あると思いますけど、最初の子どもって、やっぱりとてもかわいがりますよね。私も3人、子どもいますけど、どうしても1番目の娘はいまだにかわいくて。私は3番目ですから、大して面白くもなくて、あんまり構ってもらえないわけですよね。それでまた、私の作家人生に大きな影を落とすというか、影響してるんです。

戦争中ですから、私いまだに、鉛筆ってこう持ちますよ。これ直らない。脚本、書いたりしますから、結構ものは書くんですけども、ここにペンだこができるんですよね。これ、だから戦争の犠牲者の一人なんですけども。

父、一番の働き手が戦争へ行って、あと、おじいさん、おばあさんと私の母、大人3人で2町近い田んぼがあって、割に大きい農家だったんですけども。だから3番目の子どもなんか、構ってる暇ないわけですよね。だから、いつも田んぼのそばの木の根っこに縄で結わえられて、犬みたいにしていたらしいんですけども。しかも、そうでないときは、すぐ裏に、ろうあの耳が聞こえないおばさんが住んでらっしゃって、その方に預けて私は育ったもんですから2歳まで、物を言わなかったらしいんです。うーとかあーとかしか言わないんですね。なんでかっていうと、そのおばさんがろうあの方だったから、言葉、話しませんよね。その人へ1日中預けてるもんですから2歳まで物が言えなくて、てっきり不憫な子どもができてしまったと親が思ったそうですけど。そのうち、物は言うようになったようですけど、そういう、かわいそうな三男坊で。

隣にいるのは母方の祖父、おじいさんなんですけど、この方は大変優しい人で、そういう私の立ち場を見て、この人だけ私をかわいがってくれたらしいんですね。だから、おじいさんの所、膝へ手を伸ばしてるんです、これ。けなげにも。そういう本当に私の生まれ育ちを象徴する写真の1枚なんです。
(ちょっと進んでください。)

そんなことありまして、高等学校は昔のことですから、県立岐阜北高校へ入学したんですけども。その前に小学校、中学校という時代があるんですけども、今はとても優しい監督として有名ですけども、岐北中学、昔は稲北中学って言いましたけども、北のほうの村が4カ所一緒になって一つの中学校になってたんですけども、言葉はあれですけども、学校始まって以来の横着者といいますか、先生5人ぐらい相手にして「違います、先生がたが間違ってます」って毎日やってたらしいんです。泣く子も黙ると言われてたらしいんですね。それは私のおばあさんが言ってましたけど「おまえな、おまえのことを泣く子も黙るって言ってるぞ、みんなが」なんて言って、とても横着な時代だった。

それを経て、そういうのはすっかり飽きまして、北高へ入ったら、理由も他にもあるんですが、初恋に破れたりとか、いろいろありまして、すごいブルーになっちゃいまして。一緒に北高へ進もうとしてた、好きだった初恋の人みたいな人がいるんですけども、その人、運悪く入試に落ちちゃいまして、一緒の学校行ってれば毎日会えますから1回ぐらい顔、見れるけども、学校が別々になっちゃうんで会うことができないんで、ものすごくブルーになりまして、もうあの子と会えない。昔の恋愛ですから、指1本、触っておりませんから、ただ顔さえ見れば気が済むみたいなことをやってたんですけど。それでブルーな時代が始まりまして、それが私の高校時代(北高3年間)でありました。
(-スライド- 次へお願いします。)

これが私の助監督時代です。黄色い矢印がありますけど、あれが、お尻こっちに向けてるのが私。一応曲がりなりにも4年生の大学出て、インテリということじゃないですけども勉強していって、助監督っていうのは監督の下だから、多少ましなもんかと思ってましたけど、毎日これなんですよ。床磨きか砂利運びか、穴掘りかみたいなことを。

私は病み上がりっていうこともあったんですけども体はそんな強くなかったんで、とてもしんどかって、京都の亀岡っていう所が保津川登った所に、そこに野っ原に大きな館、オープンセットを建てて、そこで撮影をした、新藤兼人さんっていう有名な監督さんの作品、弟子になったんですけども。

あんまりしんどいんで、よく勉強が苦手な子どもは学校に火つけようとしますよね。これさえなくなれば楽になるってやつですね。そんな特別なことじゃないですよ。確かに火つけて燃やしてしまえば嫌いな学校へ行かなくて済むわけですから。それと同じことを、こんないい年して、このオープンセットに火つけてやろうかと思ったぐらいなんですよ。思っただけで、もちろん実行はしていませんけども。それぐらいしんどい時代が始まりましたね。

でも一応プロの世界に入ったわけですね。周り見渡せば、新藤兼人監督も著名な監督でしたけども、音羽信子さんとか木村功さん、そうそうたる俳優さんが毎日そばにいるわけですから。それで、京都のプロ中のプロみたいな照明、ライトをやる方とか、かっこいいカメラマンが毎日うろうろしてまして、いやあ、プロの世界へ入ったっていう喜びはあることはあったんですけど。

しかも、日本映画っていうのは今こんなに落ち込んでますけども、実は私が高校卒業してた1960年の春に東京へ行ってるんですけども、その年が日本映画でもっとも観客が多かった年なんです。年間、延べ14億人。これ映画館へ入る人の数ですよ。学校や神社なんかでやる、そういう二次的な上映は別にして、映画館へお金を払って入る人が14億人いたんですね、年間、延べ。

俳優さんでいうと石原裕次郎さんの若い出始めの頃ですね。それから中村錦之助さん、萬屋錦之介さんたちが活躍してた頃で、このとき日本映画のもっともピークのときだったんです。経営的に当時は映画産業っていってましたから、映画のことを産業っていってたんですからね。今はとても産業どころじゃありませんけども。

それが終わって、私4年生のとき病気して中退してるんですけど、4年行ってましたから一応映画学科の監督コースっていうのにいましたんで、いずれ監督になろうとは思ってはいたんですけども全然、4年たったら一気に5億人ぐらいに減っちゃうんです、お客さんが。3分の1ですね。4億か5億に年間お客さんが減って。どんな商売でもお客さんが3分の1になれば慌てますよね。それで新規採用がほとんどできなくなって。

それまでは岐阜出身で篠田正浩監督さんがいらっしゃいますけども、篠田さんは私より10年先輩なんですね。これが日本映画の絶頂期に松竹っていう大きな会社の正規の採用試験を受けて、篠田さんは加納高校から早稲田大学に進まれて、松竹に入社した方なんです。よほど優秀だと思います。

篠田さんは早稲田ですけども、大島渚さんもその頃で、大島渚さんは京都大学法学部ですね。本当は検事総長かなんかやってなきゃいけない人なんですけど、その人たちも助監督になりたくて松竹に受験して、最高、倍率が20倍ぐらいになったことあるらしいです。その前後の秀才というか、すごい連中が受けて、2000人に1人ともいわないぐらい難しかったんですね。松竹の助監督も駄目だった、東宝も駄目だった、東映も駄目だった、しょうがない朝日新聞へ行こうかって、そんな時代だったんですよ。それ私の10年前なんですね。私のときはすっかり駄目になって、受験したくても採用試験もやってないような時期に世の中に出たっていうのが私の映画人生の始まりです。（スライド- 進行）

この大きいほうの写真が『鯉のいる村』私のデビュー作です。親子映画っていってましたけど、東京へ行った娘が生んだ子どもがちょうど夫婦仲にトラブルがあって、子どもを田舎へ預けてる間に、いとこの少年と子ども心の恋愛感情みたいなのが生まれたりなんかするんですけども。それ1時間5分ぐらい、短い映画なんですけどね、当時は映画界がちょっとエッチな映画とかヤクザの闘争を扱ったような暴力映画がとても多くて、親からすると映画館なんか行っちゃいけないっていうぐらいの時代だったんです。だから映画館に近づくと、子どもが近づいちゃいけませんっていうぐらい、そういうときに学校の先生がたとかが、子どもがちゃんと見れて、親と子でも一緒に見れるような映画が必要だろう、文化が必要だろうということで。親子映画運動っていうんですけども。

私は29歳のときに、まだ助監督になって6年目だったんですけど、この頃は大体、大学を出て映画会社に入って35から、遅い人は40歳ぐらいで大体監督になる、監督昇進っていうんですけど。

突然監督をすることになって。でも子どもの映画かと思って、私、児童映画たくさん撮ってるんですけども、本当は子ども、いわゆる子ども好きじゃないんですよね。好きじゃない。嫌いっていうんじゃないんですけども、子ども時代って、自分自身も経験してきてますから、そんなに別に子どもだから純真だなんてことは単純には思ってなくて、あんまり子ども好きじゃなかったんですけど子どもの映画を撮ることになりまして。

監督になったのはうれしかったんですけど、例えば篠田正浩さんは岩下志麻さんと結婚して、きれいな女優さんと結婚して、大島渚さんは小山明子さんという松竹のトップ女優と結婚して、やっぱり監督はいいなと、ちょっと思ったんですけど、この映画はそういうわけにはいかないですね。

今までお話ししたように産業自体もこうなってましたから、就職もないし、これなんか私、月5000円もらってやってたんですよ、助監督の見習い、最初のさっきのあれですね。だから監督になったら、助監督のときよりも収入が減っちゃいましてね。1年かかって、この映画を作ったんですけど、25万円しかもらえてないんですよ、ギャラが。25万円ってことは月2万円ぐらいじゃないですか。この頃、大卒の人が大体、悪くても3万か4万は給料がありましたけどね。監督になっただけで、そんな状態でスタートしたのが若いときで。

（スライド-進んでください。）

これも2作目の『二つのハーモニカ』。右側の小さい写真が出てますけども、さっき特攻隊の『月光の夏』って映画のことをお話しされたと思いますけど、これは『二つのハーモニカ』といいまして、原作があるんですけども、特攻隊と特攻で戦争へ行かなきゃいけない若い兵隊さんと、その基地がある少年たちの友情みたいなのを描いた映画です。これも本当に予算がない小さい映画だったんですけども、ここからサクセスストーリーが始まるんです。日本映画監督協会新人賞っていうのがあるんですね。文学の世界だと芥川賞みたいな、一般には知られてませんけど、業界では本当に欲しい賞なんですよ。だけど年に1人しか取れませんから、なかなかもらおうと思っても、もらえる賞じゃないんですけれども。

これが、そういう小品にもかかわらず、新人賞になりまして、ここで本当に世間があっと言ったんです。大体、松竹とか東宝で作る、ちゃんと正規に入った若い監督さんが大体もらうことが普通だったんですけど、独立プロの貧乏な映画作りをした私がなぜか新人賞になりまして、そこからサクセスストーリーが始まるんです。

映画っていうのは、川島さん、弁護士さんにしても、お医者さんにしても難しい、勉強を一生懸命して資格を取って医師免許を取る、弁護士免許を取ります。そうすると一生、使えますよね。ところが監督は免許は全然要らない。誰でもできるっていったらできるんですけどもね、まず2本、お客さん呼べなかったら、それでもう監督生命は終わりなんです。東大主席で卒業して監督になったとしても、2本当たらなかったらもう駄目です。二度と再びお声は掛からないっていうか。

私は幸いにして、さっき申し上げたようにデビュー作がつぶれそうになってた小さい映画の配給会社でしたけども、京都映画って所がね。もう倒産寸前だったのが、私の作ったデビュー作のおかげで大ヒットしたんですね。学校やホールで上映するんですけども引っ張りだこみたいなことになって。これは金が稼げる若い監督が出たってことになったんでしょうけど。

そしてまた、この3作目で、そういう結構ありがたい賞が取れたりして、私のサクセスストーリーの最初が始まるんですね。そしてもう一本、『あすも夕やけ』っていうのを撮って。（スライド-進んでください。）これは監督になって6、7年たってましたかね。（右の下、これ出してください。）これ、なんかやってるの私ですけども、右側が音羽信子さんで、左手は、この間亡くなった樹木希林さんです。若いとき。

看護婦さんの生活って今でもそうでしょうけど、当時は夜勤夜勤で、月に8回ぐらい夜勤があるわけですよ。夜勤というのは夜中の12時頃、出ていくわけですよね。だから、これから夫婦で仲良くしようかと思ったけど、嫁さんがいなくなっちゃう話で、看護夫婦の哀歓といいますか、悲しみとか喜びみたいなのを描いた映画なんですけど。これが初めて親子映画じゃない大人の普通の映画を作った最初です。これは喜劇調の映画でしたけども、私は喜劇を撮ったのはこれが初めてなんですけども、その後ないですけど。

私は、いつも試写のときに録音機を携帯、回しときまして、お客さんがどれぐらい反応しかっていうことを調査してるんですね。それで、確か123回お客さんは笑ったんです。1時間半ほどの映画を見てる間にね。そうすると1分に1回ぐらいは笑わせてるわけで、俺も喜劇の才能もあるんだな、なんて思った作品でした。

そして、これがその次、それまで新藤兼人監督の近代映画協会って、貧乏プロダクションでやってたんですけども、初めて新人賞を取ったということで、業界も多少注目したんでしょうね。よその会社から注文が入りました。二つの『日本フィルハーモニー物語 炎の第五楽章』って。

これオーケストラの日フィルっていうの今でもありますけども、今、映ってるのは渡邉暁雄さんといって、鳩山総理っていましたね、2代、鳩山一郎さんが僕らの子どもの頃、総理大臣やってましたけど、その息子さんが民主党で由紀夫さんって方が総理大臣やって、親子で。その鳩山一郎さんの娘さんをお嫁さんにもらった、日本の指揮者の草創期の第一人者なんですけど、その方に棒を振っていただいて、オーケストラの労働争議を扱った映画なんです。

その頃から労働争議やってるわけですから、社会派なんてことをいわれるようになって、たまたま、そういう題材だった、別に社会派でもなんでもないんですけども。さっきの紹介にも社会派って書いてありましたけど、確かに戦争の映画もたくさん作ってますし、労働争議の映画も他にも作ってるもんで、そういわれることに別に文句はないんですけども、社会派、神山なんていうのが定着し始めた頃の映画ですね。

これが今の『炎の第五楽章』で、左側が風間杜夫さんの若い頃の、右側が田中裕子さんです。これはまだNHKの朝ドラに出て、人気が出て初めて本格的な映画に出演された頃。渋谷のデパートで、いい洋服がなくて、プロデューサーが「監督と裕子ちゃんと好きなの買ってきなさい」なんて、お金渡されて、3時間ぐらい田中裕子さんとデートしたことがある。今でも忘れませんね。楽しい思い出があった。（スライド）
これは終わった頃ですね。真ん中が裕子ちゃんで、風間杜夫さんですね。私も一応、若いときがあった。

そして、これ皆さんご承知かも分かりませんけど、「近代映画協会から独立して世界へ」って書いてありますけども、これが『ふるさと』。旧揖斐郡徳山村に徳山ダムができますよね。ご存じかと思いますが、あれは、当時東洋一のダムって、貯水量でいいますとね。今は中国に大きなダムができましたから完全に負けてますけども、当時は東洋一のダム、ロックフィルダムの。

徳山ダムっていうのは、ご存じかもしれませんけども、全村水没なんです。徳山村っていうものが全部、沈んじゃうっていう。それまでも、水力発電のために、全国にいっぱいダムはできたんですけども、大体、何々村は何とか部落が沈むっていうのが普通だったんですけど、徳山ダムの場合は全村水没っていうことで、それこそ報道関係、新聞社とかテレビのかたがたもすごく注目してまして。

そこへ行って、その映画を撮影するんだということで、大変毎日のように取材が入ってまして、映画の取材っていうのは普通は仕込んで、宣伝部があの手この手で新聞社に取材よろしくお願いしますってやるんですけど、この映画は、そういう社会的な注目を浴びてましたから、ほっといても毎日のように記事が出るんです、新聞へ。

それがすごく効果があったと思うんですけども、岐阜県下で23万人の方が、この映画を見てくれた。もちろんそ

の中には学校上映とか、地域上映の数も含まれてますけどね。

私、毎週岐阜へ来て、柳ヶ瀬の映画館でやってたんですけど、とにかく、立ち見で後ろのドア開いちゃうぐらい土曜日曜はお客さんが入って大ヒットしたんです。

地味な話なんですよ。この一番左側が加藤嘉さんっていうんですけど、おじいさん役。おじいさんが主人公の映画っていうのも非常に珍しいんですけども、これがヒットするとは夢にも思ってないけど、なんかやりたい映画で、原作が平方浩介さんと、今でもご存命ですけども、岐阜の児童小説を書く先生で。

この後、写真見ていただけますか。長門裕之さんと樫山文枝さんですね。（もうちょっと送ってください。）これが、『ふるさと』の東京の劇場ですね。この地味な映画に朝から行列ができるほどお客さんが入ったんですね。
（また、ちょっと送ってください。）

これが、今日、どうしてもお話ししたいところで、モスクワのまだソ連時代ですね。ソ連がロシアに戻る前ですけども、ソ連時代に世界四大映画祭の一つ、モスクワ映画祭って大変盛大な映画祭なんですけど、そこに日本代表作品に選ばれまして、加藤嘉さんは行ってなかった。私は行ってたんですけども。
（だいぶ戻してください。）

これ私ですけど、このスーツが当時で15万円したんです。今だったら50万円ぐらいします。とてもいいものなんですけど、日本代表になったんだからそれぐらいのものをっていうんで、無理して作ったスーツなんですけどね。

この前日に『ふるさと』は夜の10時から上映してんですよ。夜の10時から、終わったら12時じゃないですか。皆さんどうやって帰るんですかって。2000人、超満員なんですよ、大きな会場で。そしたら、こういう今はホールとかなんかも大体9時には終わって出なさいということがありますけども、所、変わればで、ロシアでは帰る人はどうするんですかって、それはもう見た人の勝手だっていう考えなんですね。道路で寝てもいいし、歩いて帰ってもいいし、好きにすればいいって考えなんで。

本当に10時に始まるんですよ。始まってから、これは表彰式ですけども、上映が始まったのが夜の10時で、終わったら12時ですよね。それで、終わったときに11時55分頃ですね。2000人お客さん入ったんですよ。満場総立ちになるわけですね。こんなこと映画ではあり得ない。普通はないんですね。この3倍も4倍もあるよう会場ですけども、満員にお客さんいる、全員、総立ちなんですよ。

私たちはゲストですから2階の貴賓席みたいな所で、日本のデレゲーション。私は若かったから一番端っこにいたんですよ。東宝や東映の社長さんが頭のほうにいまして。そしたら、日本の代表団に向かって、ブラボー!なんですよ。「あ、グランプリだ」と僕は思ったんです。そんな映画あんまりなかったんですから。

そしたら、ソビエトって社会主義国家でしたから、そのときソビエトは政治的に非常に応援をしてた南米のニカラグアっていう所、革命の英雄の映画が来てまして、後で聞いたら、審査委員長に通訳を通じて聞いたら、このとき私、元有名な監督さんなんですけども、来られて、ロシア語でべらべらなんかしゃべってるんですよ、30秒ぐらい。なんか慰めてるような感じがしたんで、ロシア語だから分からないんですけども通訳さんに、「さっき、あの監督なんて言ったか聞いといて」って言った。案の定、「審査委員会では君のがグランプリだったんだけど、わが国の特別な事情により主演男優賞に回したから悪く思うな」と言ったらしいんですよ。私がグランプリはもらってるのに、世界のグランプリは取れなかった。運のいいような悪い監督になってしまったんですね。

でも、とても賞のことはともかく、2000人のお客さんが総立ちになって。岐阜の徳山村の、ぼけ老人の話ですからね。でも、私はそのときすごく思ったのは、40年ぐらい前ですけども、1983年で。今はほら、今年も暑くて、私も本当はジャケットぐらい、きょう講演なんで着てこようと思ったけど、あんまりにも暑いんで駄目だなと思ってシャツで来てしまったんですけどもね。やっぱり自然が変わっていくっていうか、つまり人間も大きな意味では生き物、生物ですから、生物が健康に生命を維持するような条件（の変化）が日本だけじゃなくて世界中で起きてるんだということをすごく思ったんですね。そういうメッセージがこの『ふるさと』という映画には多分あったと思うんです。

それで、映画も良かったって、良かったんでしょうけども、何か、今、現代人が一番、迫られてることが短い映画の中にある。そんなことは理屈では一言も言ってないんですけども、ダム建設のために村を追われてく人たちの

話ですからね。最後、本当に哀切、悲しい終わり方をするんですけども。

そういうことをすごく思った作品で、私の本当に記念碑的な作品と言っていい。しかも、初めて岐阜で、故郷岐阜県で、皆さん、川島さんなんかにも前売り券を買っていただいたり、友人、知人に。私こうやってるとき、大体人のお顔を見るとすぐ頭下げてます。1000円の切符を買っていただかないとこの映画ができないっていうんで、いつも人に会ったら、すぐ頭下げる癖が付いて。そんなふうにして作った映画です。私の映画人生にとっては本当にエポックの作品でした。

これは次の3年後に、また同じソビエト、タシュケントっていう所でウズベックっていう国がありますけども、当時はソ連だった。そこで『春駒のうた』っていう戦争遺児の話をやったら、今度はグランプリもらいましたね。でも、グランプリもらいましたけど、田村高廣さんです、右側はね。主演されて、おじいさんの役ですけど。モスクワ映画祭ほど規模の大きな映画祭ではなかったんで、そう注目はされなかったんですけど、一応、世界の映画祭で最優秀作品賞を取った映画です。

それで、そういうことがあって、業界は良さそうな監督はいつも探して、この物語をどの俳優で、どの監督でやったら、脚本家も大事ですけども、ていうことをいつも考えてるのが映画会社の仕事ですから。それでメジャーぐらい、私が入りたくても入れなかった松竹や東宝から、「おまえ監督しないか」っていう声が掛かるようになっていくんですね。

これは岐阜の神岡鉱山ってありますけど、北のほうに、そこで、これ倍賞千恵子さんですけども。殺人事件、サスペンス映画なんですけど、『旅路村でいちばんの首吊りの木』なんていう長い小説を映画化したものです。これが最初の作品で。

それで次のを見てください。これがまた第2のエポック作品ね。『ハチ公物語』、ご覧になったことあると思いますけど。ある晩、松竹の若いプロデューサーから9時頃、自宅へ電話がありまして、忠犬ハチ公、渋谷の、あれ映画にしたいんですけど監督してくれますかっていう電話が入って。

私、5、6歳のときに、西郷で子どものときに、昔は川へいつも泳ぎに行ってましたから、途中に親戚のうちなんですけども、茶色の犬がいまして、当時、放し飼いですから、がばっとすねやられまして、犬が嫌いっていうより怖いわけですよ。ちっちゃいときに、がばっとかまれたんですからね。

犬は本当に苦手だったんですけども、師匠の新藤兼人監督が「来た仕事は絶対、断っちゃいけないって、それが仕事師の鉄則だ」って言うわけですよね。なんでもいいから仕事の発注が来たら、はい、やりますって言えばいい。それで気に入っても気に入らなくても、受けてから、どういい映画にしていくかを、ゆっくり考えればいいから。まず断っちゃいけないっていう。これが新藤さんから教わった唯一の教訓なんですけども。それで、断らずにやったら、これ公開当日からかな、映画、行列ですよね。（次に進んでください。）

これ劇場の中なんですよ。丸の内の日比谷。これ9階までのビルなんですね。階段に人が並んでるでしょ。これが9階までずうっと。これは次の回、待ってる人なんですよ。映画館で、こんなとこ見たことないでしょ。これ9階まで、ずっと2時間お待ちになってるんです、お客さんが。それぐらいヒットしたんですね。

これは銀座だった、これ銀座日比谷ですね。上野でも浅草でも池袋でも渋谷でも同時にやってますから。これ見てください。今、立ち見ってできませんけども、毎日これなんですよ。思いがけない大ヒットになって、後々はアメリカの映画監督さんがリメイクさせてくれつって、アメリカで、また『HACHI』っていう映画ができましたけども。日本

映画をアメリカが作り直すって大変、珍しいことで。

私にとっては、この間、一昨年でしたか、上海から六本木で、お酒、飲んでるときに若い方が来てて、一緒にいたプロデューサーが、「この監督は『ハチ公物語』の監督だよ」つったら、きゃーとかって、何がきゃーですかって、それくらい人気、中国の方ですよね。中国で『ハチ公物語』知らない人はいないくらいです。どこで見るんですかつったら、今は、こういうパソコンでも見れますし、ほとんどの人が見てて。

挙げ句の果てに上海の映画会社から中国映画を担当してくれなんて話が来て、仕事もしてないときでしたから、「いいですよ」つって、上海まで、この映画会社と打ち合わせに行ったんですけど、社長室へ行ったら、社長室の前の廊下に30人ぐらい人が、こうやって行列して待ってるんですよね。「あの方たちは何なさってんですか」って言ったら、「監督とツーショット撮りたくて待ってるんです」って、1時間前から。

それぐらい、私、日本でも多少名前は知られてますけど、でも知らない人も、たくさんいますけど、中国で『ハチ公』の監督してたんですって言ったら、神様扱いなんですよ。中国の映画、私が頼まれたのは中国の映画なんですよ。日本が絡んでる話じゃないんですよ。「中国にも、いい監督さん、たくさんいるんじゃないですか」って、「なんで日本人の私なんかに注文をするんですか」って言ったら、「いや、今度やるのは愛の映画だから、愛を描いたら神山さん以上の人はいない」なんてお世辞を言われて。

結局、その企画は結果はつぶれましたけども、そういう本当に私にとっては、いまだに2次使用、DVDなんか売れると、ちょっとだけ、少しお金100円ぐらい入ったりするんですけど、一番稼いでる私の生活を根底から支えてくれた作品ですね。

それで、そんな話ばっかしてたら時間がたってきますけど。それでも、なかなか一段と日本映画、厳しくなって、近代映画協会でも仕事ができなくなって、自分で会社を始めなきゃ、これからは映画作れないだろうなって、神山プロダクションというのを始めるんですね。社長は私ですけども、お給料は一度ももらったことはないですけども。自分の監督やってる以上、物を作る仕事ですから、できる足場っていうんですかね、自分の会社をつくろうっていうんで、つくったら、神山プロと、25年間ぐらいやりましたけど。

その第1作が『千羽づる』って、広島平和公園、行かれた方はご存じかもしれません。千羽鶴の銅像っていうのありますけど、女の子が千羽鶴を、そのモデルになった佐々木禎子さんという方の小学校6年生で白血病で原爆症で亡くなるんですけど、その悲しい話を第1回作品にやる。神山プロダクションという、また私にとっては新しい時代のスタートですね。

これも、お話ししときたいんですけど、『伊勢湾台風物語』と。これアニメーションの映画なんですよ。本当は皆さんに一回、見ていただきたいんですけど。この伊勢湾台風は1959年の9月26日に来ましたね。記憶されている人もいると思いますけど。

私、このとき北高3年生だったんです。ちょうど26日は土曜日だった。次の日が日曜ですね。27日が日曜だから。運動会になってまして、私はもう高校生で特にスポーツが好きっていうタイプでもなかったですから、いや、「運動会がつぶれてよかった」なんて言って、ただ言ってたんですけども。そのときの晩に伊勢湾台風が来て5000人以上、亡くなっていますね、あれは。

なぜ、そんな大きな災害になったかっていうことを、子どもが中心のストーリーですけども、映画にした1時間ちょっとの映画なんですけども。愛知県ではものすごくお客さん、たくさん入ったそうですけど。愛知県は湾に面してますから、そこで大災害が起きるんですけどね。そういう初めてやったアニメーションの映画ですね。

子ども心を描くって書いてありますけど、子どもの、私が最初に東映映画をやってたっていうことで、そういう注文も結構あったんですけども、何本か子どもさんの。これは野球少年の話ですね。樹木希林さん、後ろ、あれハナ肇さんですよ。上の女性が桃井かおりさん、手前が永島敏行さん。特に浜田光夫さんつったら、日活のお黄金時代のスター、脇役で出てくれたんですけどね、そんな映画をやって。

これが『白い手』っていう映画で、これは椎名誠さんっていう作家がいますけども、その方が自分の少年時代の

ことを書かれたエッセーを基にして、戦後の、まだ物が何もなかった時代の子どもたちの面白おかしい話でありまして。これも日本の国内での評価を受けた、同じ年に篠田正浩監督が『少年時代』っていう映画を撮られましたけど、どっちがいいかみたいなことを業界では、いってた作品ですね。

『ハチ公』のヒットは大きかったんですけど、映画会社は映画を作って、お客さんに見てもらって、そういう商売ですから、ヒット作がいいに決まってますけど、会社が社運を賭けるような、（進んでください。）

これは『遠き落日』って、野口英世さん、野口英世博士の生涯とお母さんを描いた、手前は三田佳子さんです、あれ。私と同い年で三田さんは昭和16年生まれなんですけど、全く同い年で、50歳のときに、あの、おばあさんまで特殊メークっていうのをやって、やってくれた。三田さんは、たくさん賞を取られましたけど、これ三田さんの記念写真ですね。お宝写真の1枚です。

この頃は、私これ50歳ですから、ちょうど、一番、働き盛りの頃で、ずっと貧乏してましたけど、『ハチ公』のおかげで、少し人並みというか、お金持ちにはなってませんけど、あんまり恥かかないぐらいの生活はできるようになったところですね。これ松竹の社運を賭けた一番、大作なんですよね。そういうものの注文を受けて、そして、また、これも大ヒット、今で言うと、興収30億円ぐらい、いったらヒット作品ですね。

野口英世さんはアフリカで亡くなってますけど、黄熱病っていうのの研究で行って、それにかかって53歳か54歳で亡くなるんですけど。日本では、もちろん野口博士は有名ですけども、アフリカでも、いまだに一番、もっとも尊敬されてる世界の人っていうかね。

当時はまだアフリカなんか非常に人種差別が強くて、ほとんどの国がヨーロッパの植民地になってたわけですけど。だから、あんまり人間とも思ってないわけです、ヨーロッパの人間はアフリカの人たちを。しかし野口英世さんは貧しい文化から立ち上がった方で、そういう貧しさってことも身をもって分かってたから、だったからだと思いますけど、非常に現地のニグロって皆さん、真っ黒ですから、人たちにも親切にした素晴らしい先生だと、いまだに尊敬され、あんな銅像が立ってるんですからね。アフリカです、あれ。

このときにアメリカにもロケしまして、野口さんは医者ですから、医師の免許が要りますから。当時は、お医者さんって、みんな、かつてお侍だった人、士族しか、まず、なれなかったんですけど、唯一、農民出身で医者の資格を取った方が野口英世さんだったんですね。

借金いっぱいして、借金は返さなかった話、今でも残ってますけれども。この頃は借金、返さない、とても悪いことですけれども、恵まれた、社会の中で地位を持った人間は貧しくて、向学心で燃えてる者に援助を与えるっていうのが、いわゆるジェントルマンというか、社会の中の地位を保った人間のステータスシンボルみたいになってるんですね。今の感覚とは相当、違うんですけど。だから野口さんは、いっぱい借金、踏み倒してますけども、大出世をしたわけですから、十分、借金は返したということになるっていう捉え方で私は、この映画を作りましたけど。

さっき、おっしゃってた『月光の夏』っていう鹿児島の知覧っていう、特攻基地が今でも、平和祈念館がありますけど、その知覧から飛んでった、東京藝術大学のピアノ科の学生が特攻隊になっていく話なんですよ。本当はピアノしか弾いたことないような、ある種のエリート学生が特攻隊になって死んでいくって話なんですけどね。これが『ハチ公物語』以来ぐらいの大ヒットをします。これは松竹とか、メジャーじゃないんですよ。いわゆるマイナーでやったんですけど、マイナーでも、どこでもやっても1000人ぐらいお客さんが集まるっていう、お化けみたいな映画だったんですけどね。大変ヒットした作品です。

これは死んだ私の連れ合いの話なんですけど、これがそう、8年前に死んでしまった一緒に仕事してた加藤伸代っていう脚本家なんですけど。彼女の脚本で郡上の白鳥の『さくら』、佐藤良次さんという方の物語を、その後、「あんた岐阜の監督なんだから、岐阜の話やりなさい」ってプロデューサーから勧められてやった話ですけどね。

大体、概略そんなところで。あ、これは、お宝2（ツー）なんですね。誰だか分かります？　左。ゴクミですよ。『ひめ

ゆりの塔』っていうのやってるんですね。そのときに会社に、東宝さんがやってくれるキャスティングが配役がいまいちなんで、「もっといい人を入れてほしい」って言って、「後藤久美子を口説いて」つったら、後藤久美子さん、私、出ますってことになって出てくれたんですね。重要な役で主役みたいなもんですけど。

ものすごくわがままで鼻持ちならない女優だと有名だったらしいんですよね。「そうなの」って、「僕が見たところ良さそうな感じだけど、いいわ、わがままでもいいから、俺が何とかするから」つって一緒にやって、終わったときに記念に花束を渡す時のツーショットですけど、こんな監督は嫌だったって顔はしてないでしょ。私のお宝写真です、これね。

この後すぐフランスのレーサーのアレジさんと、このとき、もう恋愛中だったらしいですけど、1年ぐらいして、お子さんができたときにフランスから、はがきが来まして、女の子が生まれましたって、名前はこうです。そういう習慣があるらしいんです。子どもができると親しい人に名前を紹介するっていう、そういう習慣がある。それがぱっと、ある日ポストの中に入ってました。「パリの後藤久美子さん、来たよ」つって、今でも大事にしまってますけど。

大ざっぱにいいますと、ここで結構です。まだ、この後、先があるんですけど。それで、やがて『郡上一揆』、皆さん、ご覧になったかもしれませんけど、この後10年ぐらいたって、私が60歳のときに作った映画が『郡上一揆』という映画で、これはその3億5000万ぐらいのお金がかかったんですけど、川島さんもそのときから応援してくださいましたけど、いろんな方からお金を集めて。

梶原知事がまだ知事さんでいらっしゃる頃で、あの知事さん、映画でお芝居するのがお好きみたいで、「俺も出る」つって、「出るったって」つったら、5万円、持っていらっしゃったみたいです。映画のカンパですね、私費だと思いますけど。それで出してくれみたいな話になって、評定所・裁判所の裁判官の役で、ちょっと出て、ほとんど分からないですけども、出てもらった映画で。

足かけ4年ぐらいかかって、60歳になってましたから。でも私、映画っていうのは何億っていうお金、巨額の費用をかけますからね。例えば小説でしたら原稿用紙が500枚ぐらいあって、鉛筆10本ぐらいあればできるじゃないですか。あと取材とか、いろいろあるにしても本当に紙と鉛筆さえあればできる文化なんですよね。絵もそうですね。絵の具は鉛筆よりは高いでしょうけども、キャンパスと絵の具があればできますから。それで永遠に語り継がれる、見継がれるような名作ができてくわけですよね。

ところが映画は、取りあえず最低でも40人ぐらいの裏方セットスタッフが監督を初め、いまして、多いときは70人ぐらいになりますよ。作るときだけで、それぐらいの人間が動いてますね。1万円としたら、一般の人は除いて70万円ずつ毎日、消えてくわけですよね。だから、それを2カ月も3カ月もやるわけですから、本当にお金のかかる仕事なんですけどもね。

だから監督がやりたくて、できるっていうことほとんどないんですよ。私、今まで30作、映画、作ってますけど、教育映画とか、そんなの入れると、もっと100本近くやってますけど、いわゆる映画館で見ていただく映画はちょうど30作、今までやってるんですけどね。最近のあれでは、もう私がもっとも多くっていうことはないんですけど、たくさん映画を撮ってるほうで、監督協会の若い後輩の50代、40代の若い監督さんに言わすと、私はもう最後の職業映画監督って言われてますね。

最後の職業映画監督かっていうことは監督やって飯を何とか食ってるという意味なんですよ。だから、今いかに日本映画が衰退してるかと、監督になっても飯が食えないんですよ。だから奥さんがお医者さんとか弁護士さんやってると一番いいんですけども、稼ぎが安定してますから。だから女医さんの旦那やりながら監督やってたら一番いいんですけど。でも、それでは本当は職業になってませんから、いい映画っていうのは作れない。職業っていうものと絡み合って生きてないと、何ていうか、ちゃんとした映画もできないんだけど。私が最後の職業映画監督って言われてるぐらい。

10年先輩に山田洋次さんって、寅さんで有名な監督さんがいらっしゃって、私より10年先輩ですから92歳になってらっしゃいますけど、まだ、この間も新作を発表されてましたけど。その方がいるくらいで、80代の現役監

督っていうのは今、日本ではほとんど撮りませんけど。

それくらい日本映画、私なんかもある意味では責任もあるんですけども、テレビ時代ってものに対応できなくて、テレビができたから映画は駄目になったっていってるんですけど、それは日本だけの特殊事情なんですね。日本だけじゃないですけど、フランスとかイタリアもかつては映画大国だったんですけど、同じように落ちていくんですけどね。

これは大きな原因があって、なぜ日本映画がそうなったかって、お話しするだけで、また1時間ぐらいかかりますんで省略しますけども、かつての映画大国、アメリカはもちろんです、アメリカ、映画を始めた国ですから。それからフランス映画、恋愛を描くで有名なフランス映画。大体、女性とデートするとフランス映画、見たがるんでね。男は恋愛映画なんて、あんまり見たくないから、アクションものとか、そういうの見たいんで。

私も大学時代のときに、さっき言った初恋の人と他に、もう一人、好きな人がいて、でも口にも出せてなかったんですけど、突然、大学、入った年の次の正月に年賀状が来た、その2番目の方から。年賀状、来た、初めてなんですよ。多少、気があったんだなと思って、正月の3日かなんかで、「柳ヶ瀬へ映画、見に行きましょう」つって。

デート、お金がないから西郷から来るだけでも、お金かかりますし、映画、見るのもお金。映画、見てもコーヒーぐらい飲まなきゃいけませんから、当時、500～600円お金かかるわけですよ。そのお金が僕にはないわけですよね。お小遣いなんてもらえない時代でしたから。

市役所に勤めてる高校時代の同級生がいまして、オクムラ君っていうんですけど、あいつは市役所にいると思って、岐阜駅から出てから、彼女を待たせておいて、「悪い、500円、貸してくれ」つって、市役所で働いてる友達つかまえて、500円、本当に借りたんですよ。その500円でデートしたんですけど、20年ぐらいしてから、「神山よ、おまえにお金、返してもらってない」って言うから、その500円、返してなかったんですよ。20年たって500円、返しても意味がないなと思って、ビールのワンケースも送って、おしまいにしたんですけど。

映画ってものは、それくらい日本においてのアメリカ資本とか日本の農業も戦後つぶれましたね、ウルグアイ・ラウンドとか何とかって。結局、アメリカは実は農業国じゃないですか、小麦とかなんかでね。あれ、もちろん車や機械もいっぱい作ってはいますけども、本当はアメリカの一番の産業、農業なんですよね。農産物を売るには他の農業の国をつぶさなきゃいけないわけで、これはアメリカの産物を売り付けるってこと、それくらいのことは資本主義のやり方を知り尽くした国ですから、日本だけじゃないんですよ。映画も同じ手を使ってつぶされた。

どうやってつぶしたかといいますと、難しい映画、映画評論家っていうのは、ほとんどアメリカで勉強してるんですね。淀川長治さんという有名な方いましたけど、その他にもいろんな方います。みんなアメリカで映画の勉強してきてる。そうすると、評論家は新聞に、例えば朝日新聞、岐阜新聞、評論を書くじゃないですか。この映画、こういうことが良かったとか悪かったとか。難しい映画を褒めるようにって仕掛けるんですよ。

そうすると、ベストテンなんかに1番とか2番になれるような、をもちろん褒めてありますよね。朝日新聞が褒めてると思って映画館、行っても、いいっていえばいいけど、なんか、いまいちよく分からなかったつって、お客さんは出てくるんですよ。それが2回、3回、続くうちに映画って大して面白くないってことになってきますね。それで、その同じ手口をアメリカとフランスとイタリア、三大映画国だったんですね。枕を並べて落ちてくんです。落ちなかったのアメリカだけなんですね。

多分、経済、皆さん、お強い方がいれば仕掛けが分かると思いますけど、ビジネスっていうのはそういうもんで、そこからいまだに脱却できないでいるのが残念ながら私たちの日本映画界ですね。

それと、それは経済的なことなんですけど、私がさっき『ハチ公物語』のお話ししましたけど、それまでは諸先輩から私はすごく助監督時代も食うや食わずの生活してましたけども、訳あって大学時代、交際してた女性と26歳で結婚してるんですけども、監督にはなったんですけども。東京から夏休みは、子ども3人いましたけど連れてくるのに、たまに新幹線、乗せるから、お弁当ぐらいは買ってやりますよね。子どもには駅弁、買ってやって。私たち夫婦は2人で1個、半分ずつ食べて、大人のくせして、子どもには買って。

普通はその頃はジュースぐらい買ってやる時代だったんですよ。ところがジュース買ってやるお金がなくて、子ど

もは話しててもときどき泣けてきちゃいますけども、新幹線のデッキの所にある水飲み場が昔はありまして、そこへ走っていっちゃ水、飲んでるんです。ジュース買ってもらえないから。それぐらい、監督にはなったけどっていう、本当に貧しいっていえば貧しい若い頃を過ごしましてね。後々、ときどきヒットを作ったおかげで、今日まで映画がやってこれたんですけども。

最後に、もう時間が迫ってきましたから、一つだけ。映画は1にシナリオ、2に役者っていうんですね。3、4がなくて5が監督っていうんですよ。5ですから、監督なんか誰でもいいようなもんですけども、それぐらいシナリオと、シナリオって筋書きじゃないですか、物語ですよね。筋書きを見に行ってるわけですから。あと役者、その役者がそれぞれの役を上手に、あるいは魅力ある、好きな役者がお客を呼びますから、1にシナリオ、2に役者っていったので。

それは本当に真理で、悪いシナリオだと大体、眠くなるんですよ、映画館に行って。皆さん、経験あると思いますけど、あれは皆さんの体調が悪いから眠くなるんじゃない、シナリオが悪いから眠くなる。脇道にそっていっちゃうんですね。本当はこう進んでいかなきゃいけないのに、主人公の運命を通って、こう行かなきゃいけないのに脇道へ話がぱっと、それが度重なるうちに眠くなってくるんですよね。

ところが、その一番大事なシナリオ、日本映画には斜陽化したって話は先刻から、お話ししましたけど、その脚本家を、脚本家は昔は社員だったんですよ、松竹の社員で脚本を書いてた、月給もらいながら。どの映画会社もそうだった。リストラしなきゃいけない、景気が落ちたんで、まずどこから、脚本家を真っ先にリストラしたんですよ。ここから日本映画の凋落が始まるんですね、一つは。

映画の戦略もありますけども、1にシナリオっていってるのに、その脚本家を真っ先にリストラしちゃったわけ。各社、全部、軒並み。その次に監督がリストラされる。これは照明したり、いろいろ、そういう下仕事もありますから、そういう人は少し残しつつ。そうやって映画って文化の一番、肝心要のものを真っ先にリストラしちゃって、切られる者も、一応、作家気分ですから、もの書きますから、切られても書きゃいいんだろうみたいなことで。だけど、だんだん生活が世知辛くなっていって。

昔は箱根の立派な温泉、行って、脚本家と監督がごろごろ、毎日、酒ばっかり飲んで、1カ月ぐらい何にもしないんですから。どうする、ああするって、1カ月ぐらい散々、毎晩おいしい物食べて、お酒、飲んで、そろそろ書くかみたいな感じで、それ大変な経費ですよね。今はもう全然、かなり、それこそ大河ドラマ書いてるような作者も含めて、みんなマンションの狭い所で、こうやって一生懸命、書いてるはずですよね。

そういうとこに、映画ってものは本来どういうものかっていう、どういうエンターテインメントかっていうことを見失ったのが日本の現状で、それでも映画を作るってことは、私、お芝居がすごく好きなんで、子どものときから好きだったんで一生懸命やってて。

2週間、9月16日に新しい、中山晋平さんっていうシャボン玉、飛んだっていう、童謡で名作をいっぱい作ってる長野県出身の大作曲家がいるんですけど、その人の物語を、これも苦しい予算の中でやるんですけど、新しい第31作目を2週間後、9月16日にクランクインしまして。今、少し、そういうロートルになったんですけども、私の先生の新藤兼人さん、98歳まで映画、撮ってましたから、それから比べれば、まだまだ若いといえば若いんですけども。

お時間にもなりますので、そんなところで、きょうのお話は終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

IMカウンセラー講評

パストガバナー　木村　静之

本日は、ガバナー補佐の岡部賢明様はじめ、岐阜東南ロータリークラブの皆様が実行委員会を組織して頂いて、そのアイデアで素晴らしい企画を進めていただきました。

講評というよりは感想を申し上げたいと思います。

東南クラブの川島和男様の同級生ということで、神山征二郎様のお話を聞けた、非常に素晴らしい機会を頂いた事をありがたく思っております。お話に私もすっかり引き込まれてしまい、今、余韻に浸っていたのですけれど、何といっても岐阜の西郷村というところ、そういう田舎で育って、そして丁度幼いときには戦争を体験された、そういうような背景をお持ちで、そういうことが故郷を大事にするとか、戦争に対する考え方とか、そういうことを映画に、映画の背景にお入れしたのかな、と感じました。

やはり何といっても映画は、我々の心を動かすものです。そういう心を動かすような映画を作り、映画作家として不動の地位を築かれた、そういうお立場に私たちは感動を覚えます。

今日、ロータリーのIMという行事でこういったお話を聞いたということは、どういう意味があるのかと考えてみましたけれども、何といっても、職業人の在り方、そういうものを感じ取ることができたと思います。

神山征二郎様はお話の中で、「自分は職業映画監督である」、「最後の職業映画監督である」、こういう風におっしゃっておられました。職業人としての映画監督のあり方を我々に示していただいた、という風に思います。

ロータリーは何といっても職業人のあり方を学ぶ場であります。今日のガバナーの卓話の中にもありました、ロータリーの例会というものは職業人の利益の向上ですとか、切磋琢磨して職業人として人間力を高めることである、そういうお話がございました。

やはり、職業人として成功するということは、単に企業の売り上げを伸ばすとか、単に利益を上げるとか、そういうことではなくて、決してそういうものではなくて、地道なことであると思います。

一攫千金を夢見るとか、ズルをして儲けるとか、そういうことではないわけであります。最近のビックモーターの事件を引き合いに出すまでもありません。やっぱり地道に築いていくものであろうと、社会の人々が何を求めて、で、お客さんに喜んでいただくには何をしたらいいのか、そういうことを考えていく、そういうことを追求していくのだと思います。

そういう意味で本日の神山征二郎さんのお話は、こういう職業人の在り方というものを教えていただける貴重な機会となったと思います。このような機会をつくっていただきまして大変ありがとうございました。

簡単ではございますが、私の所感とさせていただきます。

次期ホストクラブ会長挨拶

岐阜南ロータリークラブ
会長　松波　和寿

只今、ご紹介を頂きました本年度 岐阜南RC会長の松波和寿でございます。まずもって、ガバナー公式訪問・合同例会、IMの企画されました岡部岐阜Bグループガバナー補佐、並び岐阜東南RCの皆様には大変お疲れ様でございました。

コロナがまだまだ燻る中での設営には大変ご苦労があったとお察ししますとともに、敬意を表します。お陰様で新たな経験もさせて頂き、心より感謝申し上げます。

来年度、コロナが完全に終息しているかどうかわかりませんが通常の合同例会、IMが実施できることを期待しており、次期ホストクラブとして微力ではございますが、誠心誠意努めさせていただきます。多数の参加をお待ちしております。よろしくお願いいたします

閉会挨拶

岐阜東南ロータリークラブ
IM実行委員長　大野　英樹

本日は長丁場となりましたが、皆様ご参加いただきありがとうございました。

6年ぶりで今回この講壇に立たせていただいておりますが、コロナで少しの間、このような盛大な会を開くことができなかったことが非常に残念でした。

コロナも少しは収束していると言えども、まだまだ何か増えてきているような気配があるみたいですけれど、どうか皆さまお気をつけていただきたいと、このように思っております。

本当に、今日、神山征二郎監督のお話、有意義なものであったと私も感じておりますので、どうかまた来年もよろしくお願いしたいと、そのように思っております。

どうもありがとうございました。

2023~2024年度
国際ロータリー第2630地区 岐阜Bグループ

岐阜東南ロータリークラブ　IM実行委員会

開催日：2023年9月9日（土曜日）　会場：ホテルグランヴェール岐山

IM実行委員会

ガバナー補佐　岡部賢明
実行委員長　大野英樹
副委員長　水上徳次　田端大嗣

（担当部門）

（兼務有）

委員会名	委員長	副委員長	委員
総務	近藤浩史	中島浩樹	小川光明　片桐勝弘 山岡操
受付登録	杉山将士	毛利敏忠	小出德光　西村勇二 近藤裕貴　酒井隆博 大橋匡幸　美濃島慎平 西田忠司　中田英臣 山田正峰
会場	水上徳次	塩谷良三	林祥元　末武憲悟 村上成樹
記録	曽根貴志	大橋匡幸	大野英樹　園部茂 杉山将士　西田忠司 佐野知宏
接待	川島和男	中島健治	美濃輪秀人　永田誠也
会計	田端大嗣	林祥元	
救護	森島巖	松原亮	永田和也

2023~2024年度 国際ロータリー第2630地区 岐阜Bグループ

ガバナー公式訪問 合同例会･IM　収支報告書

【収入の部】

	項　　目	決 算 額	内　訳	摘　　要
1	前 年 度 繰 越 金	68,886		
2	地 区 補 助 金	50,000		
3	祝　　儀	55,000		
4	合同例会・IM 登録料	1,859,000		
	岐 阜 南 RC		539,500	
	岐阜加納 RC		565,500	
	岐 阜 城 RC		130,000	
	岐 阜 東 RC		286,000	
	岐阜東南 RC		227,500	
	岐阜エトス RC		110,500	
	合　　計	2,032,886		

【支出の部】

	項　　目	決 算 額	内　訳	摘　　要
1	会 場 費	1,101,050		
2	講師関係費	450,000		
3	印 刷 費	278,000		プログラム･報告書作成他
4	会 議 費	110,000		
5	雑　　費	12,604		
6	年次繰越金	81,232		岐阜南RC
	合　　計	2,032,886		

合同例会・IM・食事会の様子

受付の様子

受付の様子

受付の様子

食事会の様子

合同例会の様子

合同例会の様子

岐阜エトスRC　田口真也会長

岐阜城RC　堀江大典会長

岐阜南 RC　松波和寿会長

岡部賢明ガバナー補佐(岐阜東南RC)

岐阜加納 RC　平松洋一会長

ポリオカー

岐阜東RC　吉川康彦会長

看板

岐阜東南RC　中島浩樹副会長

2023～2024年度
国際ロータリー第2630地区 岐阜Bグループ
ガバナー公式訪問 合同例会・IM 報告書
ホスト／岐阜東南ロータリークラブ